

学生意識調査

－学校という場所に期待すること－

富井 浩子^a 林 耕司^a 白井 結^a 長嶋 有希^a

^a 長野医療衛生専門学校 言語聴覚士学科

Results and Analyses of the Questionnaires to the Students - What the Students' Expectations are to the school -

Hiroko Tomii^a Koji Hayashi^a Yui Shirai^a Yuki Nagashima^a

^a Nagano Medical Hygiene College

要旨：本校に入学を志望する高校生の多くは、志望理由に「生徒と先生の距離が近い」ということを挙げる。入学後はここ長野医療衛生専門学校の各科教室が自分の居場所となり、そこで築かれていく先生との関係に、ある種の期待が込められていると感じる。しかし「生徒と先生の距離が近い」、この表現をどう解釈すればよいのだろうか。学生が「学校という場所に期待すること」について学生に対する意識調査を行った。結果は、学生は学校を自宅と並んで自分の居場所として認識していることがわかった。更にその場を構成する人々との関わりにおいて、最も重要な相手は友人であった。また教員との関わりにおいては、特に「話せる関係」を望んでいることがわかった。

キーワード：居場所の心理的機能、KH Coder、共起ネットワーク、共起関係

1 はじめに

筆者は、長野医療衛生専門学校言語聴覚士学科（4年制）に勤務して、15年目を終えようとしている。この間に、元号が平成から令和に代わり、言語聴覚士学科も令和4年度には22期生を迎え入れようとしている。本校に入学を志望する高校生の多くは、志望理由に「生徒と先生の距離が近い」ということを挙げる。入学し本校の教室で机に向かったとき、そこで築かれていく先生との関係にある種の期待が込められていると感じる。

学校・教室は学生にとって自宅に次いで長い時

間を過ごす居場所である。杉本ら¹⁾は「居場所」の心理的機能には「被受容感」、「精神的安定」、「行動の自由」、「思考・内省」、「自己肯定感」、「他者からの自由」の6因子があるとしている。本校の学生にとって、学校・教室はどのように機能しているのだろうか。また、そこに関わる人々とのつながりには、何を期待しているのだろうか。

本研究では学生が学校という場所に期待することを探ることを目的として、空間としての場所（学校・教室）と、その場を構成する人（教職員・友人）との関係という2つの側面から意識調査を実施したので、その結果について報告し考察する。

^a 長野医療衛生専門学校
〒386-0012 長野県上田市中央2-13-27
info@nagano-iryouseisei.ac.jp

2 方法

（1）対象

言語聴覚士学科全学生 64 名に調査を行い、56 名（87%）から回答を得た。回答者の学年と性別

を図 1、図 2 にそれぞれ示す。

（2）調査の方法

インターネットを使用した個別質問紙法で回答を得た。使用した質問を表 1 に示す。質問項目①～④はそれぞれ選択式で複数回答可とした。質問

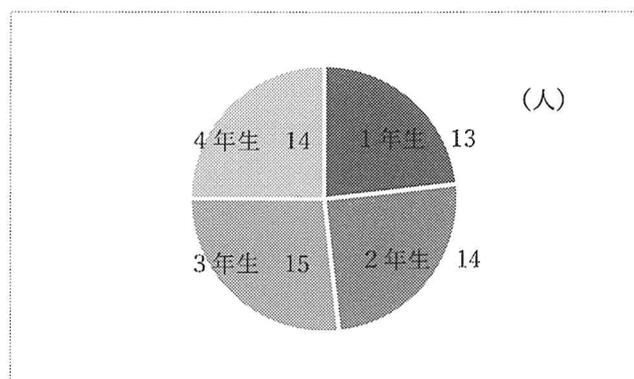


図 1. 学年

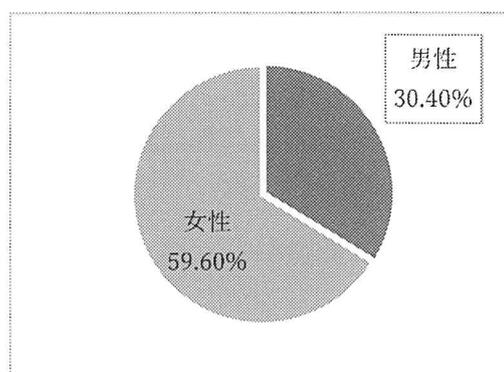


図 2. 性別

表 1. 質問項目

①あなたにとって学校は居場所であると思いますか

- 1 そう思う
- 2 どちらかといえばそう思う
- 3 どちらかといえばそう思わない
- 4 そう思わない

②あなたと所属学科の教員（外部講師を含む）について

③あなたと所属学科以外の教員・職員について

④あなたと学校の友達について

②～④の選択肢

- 1 楽しく話せるときがある
- 2 悩みを相談できる先生（友人）がいる
- 3 困ったときは助けてくれる先生（友人）がいる
- 4 他の人には言えない本音を話せる先生（友人）がいる
- 5 強いつながりを感じている
- 6 あてはまるものはない

⑤あなたにとって、学校はどんな場所ですか（自由記述）

⑥あなたが自分の居場所である、と感じる場所を書いてください（自由記述）

⑦あなたが学科の教員との関わりで、望むことを書いてください（自由記述）

⑧あなたが学校の友達との関わりで、望むことを書いてください（自由記述）

⑨あなたにとって、学校がどんな場所ならいいと思いますか（自由記述）

学生意識調査 ―学校という場所に期待すること―

項目⑤～⑩は自由記述とした。

(3) 自由記述回答の分析方法

自由記述で回答を求めた質問項目⑤～⑨に対しては、単なる回答文の羅列ではなく、テキストマイニングによる定性的な分析を行った。具体的に

は自由記述回答で得られた文章を、内容分析およびテキストマイニング用フリーソフトウェア KH Coder²⁾を用いて、共起ネットワークとして可視化した。

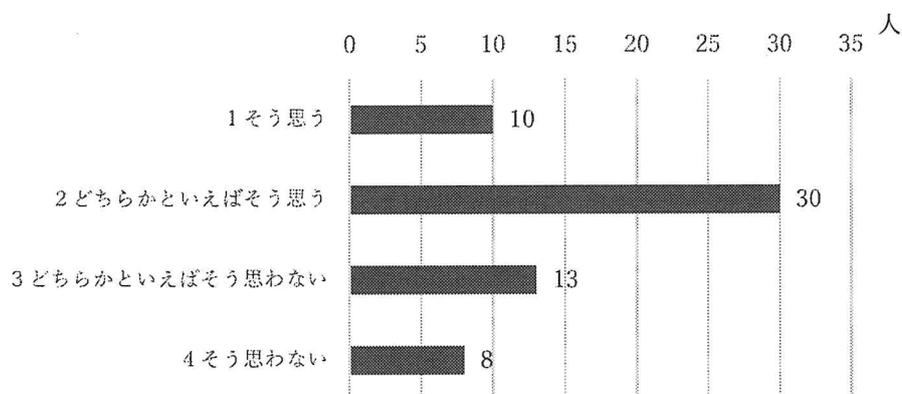


図3. あなたにとって学校は居場所であると感じますか (人)

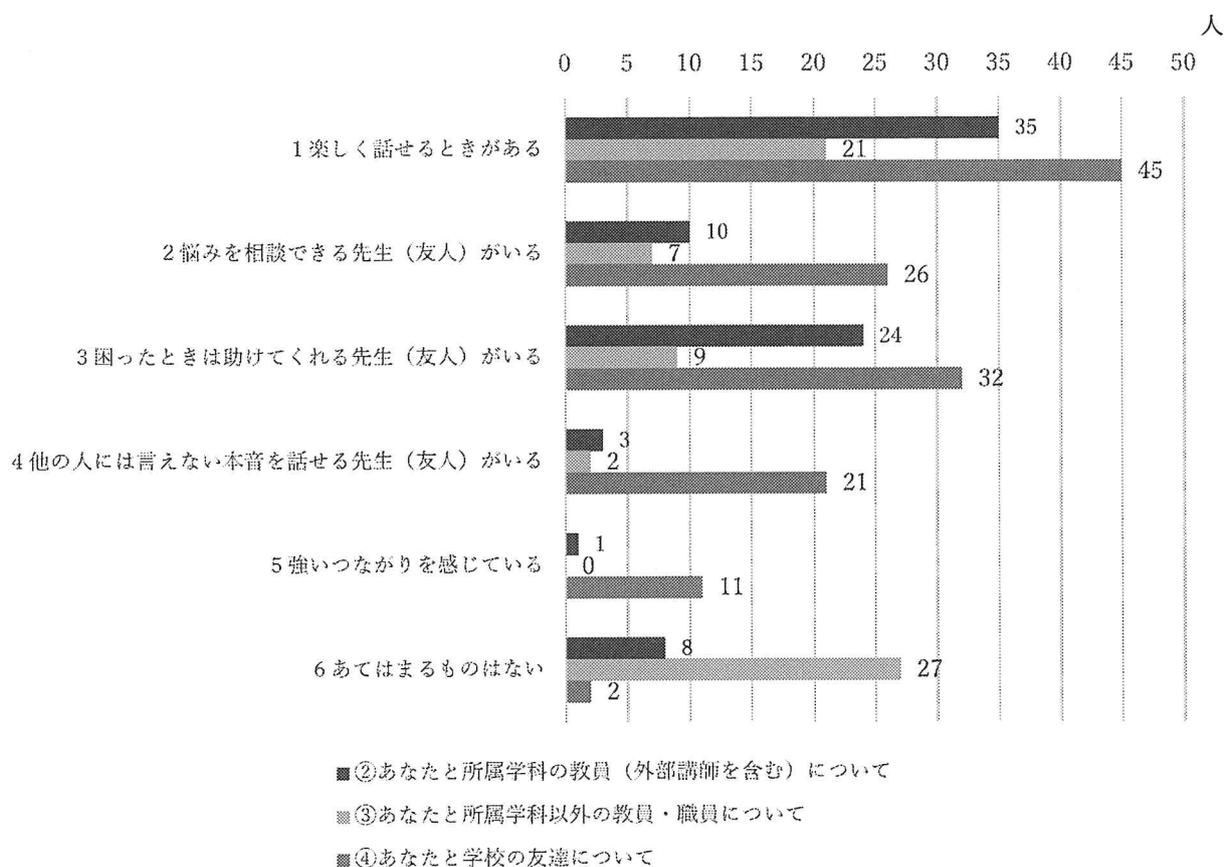


図4. 学校における人との関わり (人)

ここで、共起ネットワークとは、得られた回答を単語や文節(形態素)に分割し、それぞれの出現頻度や単語同士の相関関係(共起関係)を図示するものである。線で結ばれている円(単語)同士は同一回答文の中に共通に出現する頻度が高い、いわゆる共起関係がある。円の大きさは出現回数を示し、線の太さは共起関係の強さを示している。

3 結果

図3に、質問項目①「あなたにとって学校は居場所であると思いますか」についての回答を示した。1 そう思う、2 どちらかといえばそう思う、を合わせると40名(74%)、3 どちらかといえばそう思わない、4 そう思わない、を合わせると21名(38%)であった。

図4に、質問項目②「あなたと所属学科の教員(外部講師を含む)について」、質問項目③「あなたと所属学科以外の教員・職員について」、質問項目④「あなたと学校の友達について」の回答を並べて示した。「楽しく話せるときがある」に対しては、友人を挙げたのが45人(80%)、所属学科の教員を挙げたのが35名(63%)、学科以外の教員・職員を挙げたのは21人(38%)であった。「悩みを相談できる先生(友人)がいる」に対しては、友人を挙げたのが26人(46%)、所属学科の教員を挙げたのが10名(18%)、学科以外の教員・職員を挙げたのは7人(13%)であった。「困ったときは助けてくれる先生(友人)がいる」に対しては、友達が32人(56%)、所属学科の教員が24名(43%)、学科以外の教員・職員が9人(16%)であった。「他の人には言えない本音を話せる先生(友人)がいる」は、友人が21人(38%)、所属学科の教員が3名(5%)、学科以外の教員・職員が2人(4%)であった。「強いつながりを感じている」では、友人が11人(20%)、所属学科の教員が1名(2%)、学科以外の教員・職員は0人(0%)であった。

図5に質問項目⑤「あなたにとって、学校はど

んな場所ですか」(自由記述)の回答を共起ネットワークで示した。「学校」は、「学ぶ・勉強・資格・取得」ということばに強い共起関係が読み取れる。また「友達・頑張る・将来・思える」が共起関係を結びながら場所(学校)につながっている。

図6に質問項目⑥「あなたが自分の居場所である、と感じる場所を書いてください」(自由記述)の回答を同様に示した。「家・実家」「教室」「学校」が挙げられ、「教室」は「友達・友人・楽しい・話・絆・席」とつながっている。

図7に、質問項目⑦「あなたが学科の教員との関わりで、望むことを書いてください」(自由記述)の回答を示した。出現回数の多い語は順に「先生」「質問」「言う」「関係」である。共起関係をみると「先生」とつながるものは「言う・話せる・希望・生徒・環境」、「質問」とのつながりは「気軽・楽しい・教える・話・お願い・雰囲気」、「関係」とは「困る・相談・思う・必要・仲良く」である。他に「適度・距離」が読み取れる。

図8に、質問項目⑧「あなたが学校の友人との関わりで、望むことを書いてください」(自由記述)の回答を示した。「楽しい・相談・生活・助け合える・悩み・話」、「楽しむ・気軽・集中・頑張る」、「勉強・協力・高める・合える・一緒・過ごす」、「適度・距離」に共起関係が読み取れる。

図9に、質問項目⑨「あなたにとって、学校がどんな場所ならいいと思いますか」(自由記述)の回答を示した。「場所(学校)」に対しては、「楽しい・勉強・学べる・集中・静か・過ごす・環境・良い」、「自分・人・成長」、「思える・行く・クラスメイト・全員・今」が共起関係を結んでいることが読み取れる。

4 まとめと考察

学生が学校に望んでいるものを探るため、空間としての場所(学校・教室)と、その場を構成する人(教職員・友人)という2つの側面から調査した

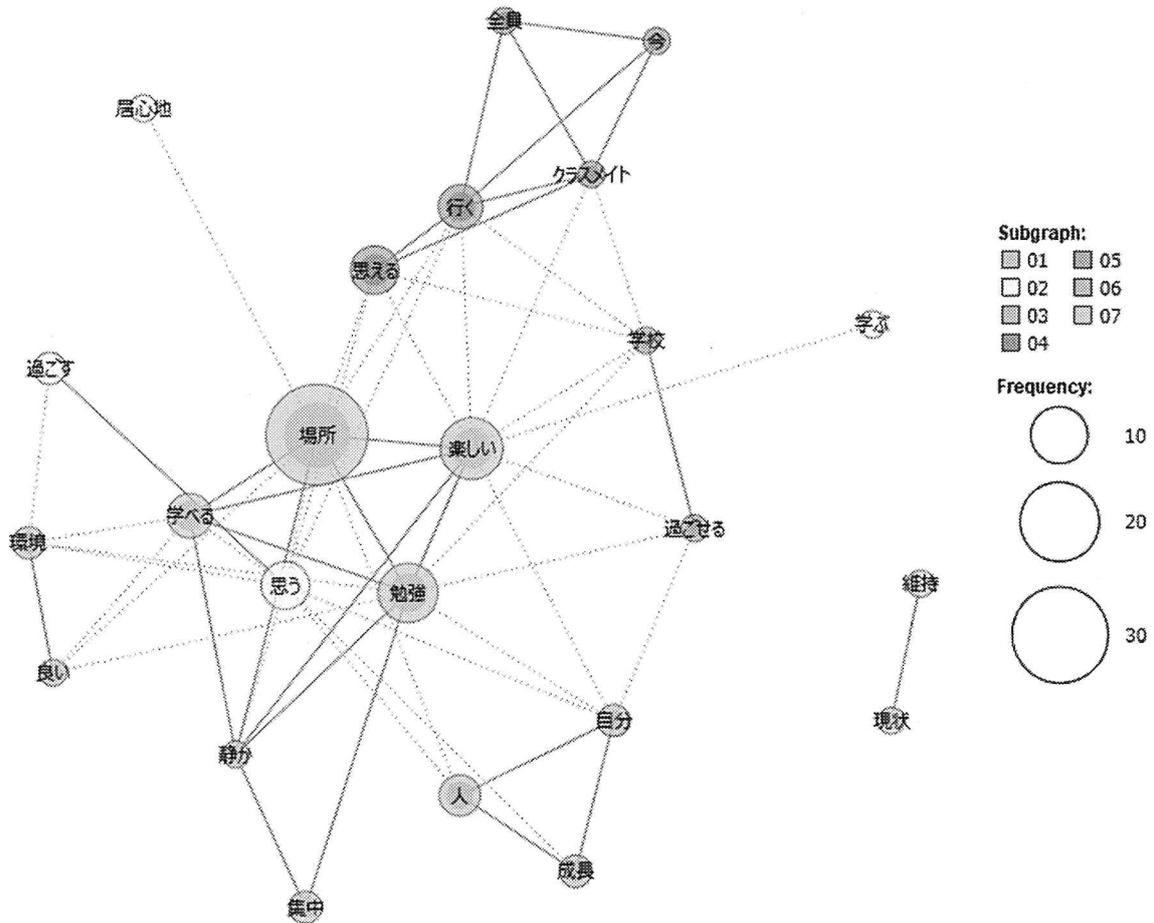


図9. ⑨あなたにとって、学校がどんな場所ならいいと思いますか（自由記述）

た。調査対象のうち74%の学生が学校を自分の居場所としてとらえていた（図3）。先に挙げた居場所の心理的機能、「被受容感」、「精神的安定」、「行動の自由」、「思考・内省」、「自己肯定感」、「他者からの自由」に照らして考えれば、学校及びクラスの一員であることが自認でき、自己の目標達成のために自由に過ごすことと、自分のために考える時間を過ごすことが許され、その場を構成する人々である友人や教職員から肯定され認められること。これによって学生は、学校・教室を自分の居場所として認識できるものと考えられる。一方で、居場所であると思えないと回答した26%の学生は、このうちのどこかに不安や不満を抱えていることになる。主観的ではあるが、質問項目⑤～⑨に対する共起ネットワークから読み取れる学生の

心理を考察してみたい。図7より、学科の教員との関わりに望むことをまとめると「先生に気軽に質問できる関係、学生が希望を言える、お願いできる雰囲気、困ったときに相談できる関係」となる。しかし、人（教職員・友人）との関係で特に重要なのは、友人であることが確認できている（図4）。青年期の友人関係は心理的に大きな影響力を持つことは言うまでもない。図8の友人との関わりで望むことから読み取れることは、「気軽に楽しめる、悩みを相談して、助け合える」という青年期らしい繋がりと、「協力して、勉強し、高めあえる、頑張ることを楽しみながら、一緒に集中する」という資格取得を目指す専門学校生ならではの希望が見えてくる。図9には、学校がどんな場所であってほしいか、に学生の思いが表れている。まと

めると、「楽しく学び、静かに集中して過ごせる環境が与えられる。自分が人として成長でき、クラスメイトと今を過ごしていると思える場所」このように読み取れる。

5 おわりに

私たち教員は、学生が過ごす学校・教室という物理的な空間を整えることにより、学生の居場所を作っていくことと、学生の希望や期待を踏まえた居場所を構成する構成員であるという立場を認識すべきである。「生徒と先生の距離が近い」の意味するところ、学生の望んでいるものを具体的に理解して、日々学生との関わりの中で意識していきたい。

謝辞：本研究をまとめるにあたり、共起ネットワークや KHCoder に関してご助言をいただきました株式会社オトデザイナーズ坂本真一先生に深謝いたします。

文献

- [1] 杉本希映、庄司一子.「居場所」の心理的機能の構造 とその発達的变化.教育心理学研究 2006,54, p 289-299
- [2] 佐野香織、李在鏞.KH Coder で何ができるかー日本語習得・日本語教育研究利用への示唆ー.言語文化と日本語教育 2007,33, p 94-95

受理日：2022年3月23日